

識字率を考える

—第10回開倫童話大賞表彰式を迎えて—

開倫ユネスコ協会
会長 林 明夫

1. はじめに

- (1) 開倫童話大賞を受賞の皆様、本日は誠におめでとうございます。私は開倫ユネスコ協会の会長を務めさせて頂いております林です。誠に申し訳ありませんが、私は、5月9日から16日まで、ユネスコと同じくパリに本部のあるOECD(経済協力開発機構)のIMHE(高等教育管理)のプログラムに参加するため、中国の北京と西安を訪れております。そのため、本日は書面でのごあいさつになることをお許し下さい。
- (2) OECDの高等教育管理についてのプログラムでは、中国の北京と西安において2つの国際会議が連続して開催されました。「知識社会(Knowledge Based Society)」と呼ばれる21世紀になり、人類が新たに迎えた社会に本格的に対応するために、大学をはじめとする高等教育機関はどのような使命(ミッション)を、どのような財政基盤(つまり、マネー)を活用しながら、どのように効果的に管理運用(マネジメント)すべきかが熱心に議論されております。特に、毎年100万人ずつ増え続けている中国の大学生数に対応するために、大学教育の質をどのように向上させるかに大きな関心が示されました。
- (3) この中国の会議で強調されたのは、大学に行き学ぶ目的とは何かということであります。大学で学ぶ目的とは、「知識社会」に対応できる基本的な能力、とりわけコンピューターと英語を意のままに使いこなせる能力を培うことは当然のこととして、その上に立ち自分に合った専門的な知識を確実に身に付けて卒業後に「仕事に就くため」であります。「自分の力で新しく仕事を始めるため」であります。つまり、就職したり起業(仕事を起こす)したりするために大学での教育はあるのです。また、ユネスコが提唱した「生涯にわたる教育(Life Long Learning)」の重要性も、この会議では強調されました。生涯教育(Life Long Learning)の目的は、大学などの高等教育機関に一生の間に何回も出入りすることにより、どんどん進化する「知識社会(Knowledge Based Society)」に対応できる新しいスキルを身に付け、「生涯にわたって仕事に就ける」ため、あるいはスピンアウトつまり今までの勤め先を辞めて新たに起業する(仕事を起こす)力を身に付けるためであります。生涯教育の目的も、生涯にわたって仕事に就く「就職」と、新しく仕事を始める「起業」のためであるというのが、会議での結論でありました。
- (4) 大学とは、「真」「善」「美」、つまり真理とは何か、善く生きるとは何か、そして最終的には一人ひとりの人生の、地域社会・国家・地球における美しさとは何かを追求する場所、現実の経済社会とはあまり関係のない学問追求の場であると心の奥底で考えていた私は、この会議での議論に参加して少なからずカルチャーショックを覚えたのであります。
- ただ今、表彰式に参加なさっている皆様がいらっしゃるここ「足利学校」は、日本最古の高等教育機関であり、日本の中世の学問の中心だったところであります。全国から3000人余りの学僧、つまり学問を志す僧侶が集まり、当時中国から伝えられた最先端の学問を寝食を忘れるほどの気概で学び合っていました。この足利学校で、中国の大学生や既に大学で学んだことのある人々が、何のために大学で学ぼうとしているのか考えることは意味深いと、私は考えます。皆様はどうお考えですか。

2. 識字率を考える

- (1) 足利学校をお借りして表彰式を執り行っております開倫童話大賞は、お陰様で第10回を迎え、今回も約300の作品が寄せられました。

この童話大賞を主催する開倫ユネスコ協会は、「心の中に平和の砦(とりで)を築こう」というユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の精神に基づき、「人間の安全保障(ヒューマン・セキュリティ)」の促進を基本理念に設立されたものであります。戦争を防止したり紛争を抑止したりするためには、国としての国家の安全保障が不可欠です。また、一人ひとりの人間に着目した「人間の安全保障」も重要です。一人ひとりの能力を強化すること(エンパワーメント)、一人ひとりが自分や家族、地域の人々の生存を保護すること(プロテクト)が「人間の安全保障」の内容であります。

- (2) 一人ひとりの「人間の能力を強化」する上で一番大切なものは何であると皆様はお考えでしょうか。私は、読み書きができること、人の話が理解でき、自分の考えを明確に述べることのできる能力を身に付けることが、最も大切なものの1つに挙げられるのではないかと考えます。ただ単に、「こんにちは」・「さようなら」などのあいさつができるレベル、単語だけでコミュニケーションするレベルではなく、「知識社会」に対応できるレベルでの読み書き能力、コミュニケーション能力を持つことが、現代における「能力強化」のためには必要であると考えます。読み書きができる能力をどのくらいの人々が持っているかを示す指標として、「識字率(しきじりつ)」という言葉があります。具体的にいえば、毎日家庭に配達される新聞を「読み、内容を理解し、自分の意見を口頭で述べ、文にまとめることのできる能力」であると言えます。現代における識字率とは、新聞を読んで考えることのできる能力であると、私は思います。
- (3) コンピューターを自由に使いこなすこと、英語でのコミュニケーション能力を身に付けることも現代における「識字率」に入るもので、「人間の安全保障」の内容となる「能力強化(エンパワーメント)」に直結するものと考えます。大学でそのための勉強のみをするのもいかなものかとは思いますが、学校を出てから仕事に就いたり生涯にわたって仕事に就くために学び続けることも、「能力強化」のためには必要不可欠かも知れません。

3. おわりに

- (1) 現代における「識字率」を身に付けた上で大切なことは、「創造性の発揮」であります。そう考えると、自分の頭脳でストーリーを組み立て、それを読んだ人々に感動まで与えることのできる童話を書かれた、ここにお集まりの皆様は素晴らしい方々であると思います。
- (2) 最後に、今年3月にフィンランドのタンペレ市立図書館の中にあるムーミン谷博物館を訪れたときの感動を、皆様にお伝えしたいと思います。
- ムーミンの作者トーベ・ヤンソンは、童話を通じて、自分の様々な思い・深い感動をフィンランドのみならず世界中の人々に示し続けて下さいました。
- どうか、ここにお集まりの素晴らしい表現能力をお持ちの皆様も、この受賞をきっかけにして、自分の様々な思い、深い感動を、友達に、そして、日本のみならず世界の人々に生涯にわたり示し続けて下さるよう希望いたします。
- (3) 最後になりましたが、第1回目から審査にあたって下さいました小説家の馬里邑れい先生、ご多忙中にもかかわらずご臨席下さいました足利市長の吉谷宗夫先生、栃木県議会議員の斉藤具秀先生、受賞者を引率して下さいました学校の先生方、保護者の皆様、足利学校の皆様に心から感謝申し上げます。

本日はおめでとうございます。